

火星



平成15年7月号

四大抄

山尾玉藻

たんぽぽの風を狐の振り返る

まつすぐに雨降つてゐる苔の花

顕微鏡並ぶ卯の花腐しかな

青田風連れて入りけり洋食屋

峡の日の濁りてみたる山椒摘

大山の裾のトマトを挽ぎにけり

船遊び夫を亡くせし人ばかり

洞窟に二三步入りし日傘かな

大海へ及ぶ片陰とも思ふ

はんざきは重なりて月仰ぐらむ

火星作品

山尾玉藻選

岬馬すみれの窪み食み残す
梨の花明りに母の眠たがる
直角に曲つてゆきし新入生
火の山のしづかなる日の袋掛
石蓐売る一軒に海近くなり
一角はねぎ坊主なり母の畑
煙突に酒の名のあり養花天
試着室より出てきたる春の風邪
酒蔵の井戸蓋に降る桜しべ
バス降りし順に見上ぐる花木
春の息ちよつと掛かりし拇印かな
恐竜の骨の真つ白春の闇
大原女の雀隠れの脚絆かな

宝塚 杉浦典子
兵庫 大東由美子
八幡 飯塚 糸子

花筵みんな半被を着せられて
綿菓子についと乗りたる花の塵
淡海と代田平らに明けてきし

明石 戸栗末廣

ぎしぎしや見えある魚に糸垂らし
土筆摘むときをり妻と行きちがひ
妻のことほとんど知らず豆の飯
羊の子白詰草に放たるる
花どきの掌に水搔きの名残りかな
穴出でし蜥蜴にスプーン落ちてゐし
蝌蚪の上を飛んで立たせし埃かな
ぎしぎしに爪をひらきて鴉降る
手品師の血脈青き桜下なる
カレンダーはぐ音あたり花冷す
無住寺の鐘一つつく花衣
針箱の四隅にありぬ春埃
起き抜けのひとり体操花は葉に
重曹で拭ふ猫の目さくらどき

西宮 米澤光子

大和郡山 木野本加寿江

選のあとに

山尾 玉藻

一角はねぎ坊主なり母の畑 大東由美子

見たままを素直に詠んでいるが佳句である。「一角」の「葱坊主」を、老母らしく少しの敵とか種用に残しているのだから等と詮索しない方がよい。そこにある「葱坊主」に、母親を愛らしく思う作者を感じれば良いのだ。「一角」が一隅でもよさそうだが、母親に即き過ぎでやはり「一角」が良い。

土筆摘むときをり妻と行きちがひ 戸栗 末廣

この句も由美子さんの句同様こころの色の良い句である。普段顔を尽き合わせている夫婦であつても、こう言う場所での「ときをり妻と行きちがふ」の所作に、ちよつとした床しさや懐かしさを感じるものである。末廣氏の代表句になりそうな佳品である。

花どきの掌に水搔きの名残かな 米澤 光子

下五「名残かな」は人間の祖先は水の中で生息していたと言ふ事からの措辞かも知れないが、これも余り意味付けしな

い方がよい。「花どきの掌」に「水搔き」を感じるのは作者の持つ感性である。品の良い感性より成つた作品である。

大寺の庇の下の花御堂 大山 文子

句姿はいかにもオーソドックスで平凡に見えるがそうではない。「大寺」を頂く在所であつても、花祭は優しくて可愛いげな子供達の祭である。在の子達が花を摘んで集まつてくる様子が目に見える。

リラ冷や奥の明るき石屋なり 岡 和絵

この句の形はありそうにも思えるが、一句のひびきがよい。「リラ冷」と「石屋」とはむしろひびかせ過ぎでやや即き過ぎとも思えるが、中七「奥の明るき」でバランスが取れている。この明るさは石の明るさでもある。

ぎしぎしのももいろ狐雨の降る 嵯峨根鈴子

「ぎしぎし」の茎そのものは「ももいろ」と言うよりむしろ紫に近い。ここでの「ももいろ」は「狐雨」による明るさから捉えたと見るべきであろう。「ぎしぎし」の地味な泡状の花に柔らかい日が射しているのである。

結局は同じ音する種袋 築田たか糸

「種袋」には懐かしさや床しさの他、大袈裟に言えば希望のようなものがある。作者の意識の隅にもそう言う思いがちらとあつたのであろう、再度振つてみたがその音は変わらなかつたのだ。上品な俳味ある句である。

散り初めの花びら芝に立ちにけり 小林 成子

落花が芝生の上に立つたと捉えたのは珍しいのではなからうか。発見である。但し、そう捉えたただけでは一句には成らない。「散り初め」がこの句の生命なのである。真つ先に散る花であるが故に「立つ」のだ。微妙で繊細な作品である。

空の色のこりし空へちるさくら 土屋 酔月

この「空」、山囲いの中の比較的狭い空と解したい。「空の色のこりし空」はまだ暮れ切つていない青空の残つている空の事、空へ散る桜が最もよく見える時刻かも知れない。上五、中七の表現、旨味は消してあるがなかなかの表現である。

蹠の乾ききつたる通し鴨 西畑 敦子

作者は水辺で遊んでいる残り鴨の「蹠」に眼を止めたのだが、それが乾いていたのである。果たして、残り鴨の蹠が乾き冬の鴨の蹠が必ず濡れているとは思えないが、「乾ききつたる」と言い切られると納得させられる。一句の中では残り鴨よりもやはり「通し鴨」の方が落ち着く。

山一つ桜なりけり測候所 松久 幸子
海岸近くの小高い山に在る「測候所」であろう。その「山一つ」全体が桜の満開なのであろう。海の青とのコントラストが見事である。
恒星圏作品より、

眞青なる金魚のあぶく夏に入る 木野本加寿江
大和郡山在住の加寿江さんの作品だから金魚田の景かとも思ったが、「眞青なる」は金魚田では無理そうである。熱帯魚の水槽などで水が青く見える装置があるが、恐らくそれであらう。それであれば特に「立夏」に限つたことではないが、「立夏」の意識は作者の心の方にあるのだ。
獅子座作品より、

札幌の支局へ行けと春の夢 中上 照代
「春の夢」の句としては異色である。この作者は福岡在住の方、「札幌」と言えば最も遠隔地である。しかも「支局」と言えば穏やかでない。しかしこの句を見ると、悲壮な感じはない。むしろ楽しんでるようにも思える。それは季語が「春の夢」だからであらう。

差知子俳句鑑賞

花菖蒲「夜明け前」てふ濃紫 差知子

〔岡本差知子句集〕より 平成元年作

先生の八十一歳の作。その頃は八十歳を過ぎておられるという意識を私は持たず、ある時は尊敬の中で少し甘えてみたりしていたのが恥ずかしい。自分がその年齢に近付くと頼りない事ばかりである。先生は主宰としての原稿や編集の方の気配りも並大抵ではなかったと想像する。今思う師の恩である。大阪の城北公園での作品。
(千枝子)

玉藻俳句鑑賞

閨門のくろがねに來し梅雨の蝶 玉藻

〔火星〕平成十四年八月号より

所は毛馬の洗堰。水位や水量を調節のため開閉の鉄の扉があり閨門という。そこへ梅雨蝶が現れた。其処は蕪村の望郷の念止みがたかりし毛馬村。じつと目を注ぐうちに何時か夢幻の境地へ誘われる。鉄の扉と言わず古語の「くろがね」が情感を引き出して蝶をクローズアップさせる。

(高子)

恒星巻

浜口高子

貝寄風や一つ新し蟹が屋根
セロリ噛むこめかみのあり二人かな
猫の尾の手をすり抜けし春の月
崖のぎしぎしを出づ恋の猫
花莫薩を伯母の鶏横切りぬ

長屋璃子

深澤鱻

お迎へのまだ来ぬ園児夕ざくら
老残に春の闇ある鍾乳洞
菜種梅雨中途半端に終りし日
イグアナも蛙も愛し八十路なり
万愚節歩行者天国中止され

養花天うぐひす餅の粉ぱらと
大旗の食ひ残したる桜かな
手摺みしまま凹みけり八重桜
百の嘘百人にある桜かな
おほかたは根に還りたる桜葉

野澤あき

元田千重

亀鳴くを太郎の塔の知つてをり
五人なる五人に今年桜かな
けふの日の過ぎてゆくなる桜かな
花の雨膝が泣いたり笑うたり
モネの絵の水辺金魚を放ちたし

葉桜や籠の鳥声ふと高音
夏きざす硬く乾きしタオルかな
柿の花牛宥めたり諫めたり
千姫の牡丹の雨の雫かな
清水坂を下れば祇園夏夕べ

獅子座

山尾玉藻推薦

土屋 醉月

中上 照代

高松 由利子

札幌の支局へ行けと春の夢
車椅子ずらり並びて花の下
正座することの叶はぬ花見かな
大桜の幹に凭れて瞑りぬ

大東 由美子

中座して鯉を見に立つ臍かな
御霊屋へ洛中の花散ることも
春愁や掛けあるままの中折れ帽
ぼうたんの絹よりかるし吹かれをり

堀 義志郎

タクシーに四人乗り込む花の雨
井戸蓋のしかとありけり山笑ふ
しばらくは木の股にある散る桜
襖絵の花の零るる目借時

戸栗 末廣

娘等の茶髪輝く穀雨かな
食パンに畳皺あり四月馬鹿
猫の子の去りたる膝の残りけり
肺活量小さくなりぬ杉花粉

高尾 豊子

自転車に犬乗せてくる夕ざくら
すかんぼへもぐらの道の延びぬたり
地靄立つ竹の子山の奥に奥
岬よりわが町のぞみ春惜しむ

薫風や書写山頂の鬼瓦
広峰の春あけぼのの乳房色
白木蓮の闇を見つめし親鸞像
食卓にスイトピーある退職日